

— 書 評 —

田中實著『シェイクスピアの英語と文体』(ぶんしん出版)

高 杉 玲 子

これは、著者が大学の紀要に、ここ数年、「言語と文体：シェイクスピアの場合」と題して連載されていたものを、ひとつにまとめて、出版されたものである。

「シェイクスピアの文章・文体の研究はまだ遅れている分野ではないかと考えられる」と認識し、「シェイクスピアは当時一般の人々が用いた口語を中心に戯曲として諸作品を書いたわけであるが、英語そのものが、初期近代英語に属し、いささか古いだけに、英語の語感と言う点では、現代英語より英語の母語話者とほぼ同じレベルに立てるといえよう」と日本人として期待できる研究分野であるという自負のもとに研究を進めていることは、まず、指摘すべき事柄であろう。そのうえで、「言葉を上手に用いて、美しく巧みに表現する修辞法」を見直した「新修辞学」のもとに、省略法、反復法、並列法、対照法、比喩表現、修飾語としての形容詞、副詞表現、接続詞表現、代名詞表現の各論を展開している。検討されているシェイクスピアの作品は、主に、四大悲劇であるが、『ロミオとジュリエット』『ジュリアス・シーザー』といった初期悲劇、『ヴェニスの商人』『お気に召すまま』『夏の夜の夢』などの喜劇も網羅されている。

著者は、言語学者であるとともに、詩を書き、絵筆をとる芸術家であ

る。その資質を生かして、シェイクスピアの正典に挑戦している様は、注目される。シェイクスピア研究も、新歴史主義、ポストコロニアニズム、フェミニズムの洗礼を受けて、大きく変化したが、今一度、原点の言語に戻って、文体美学を考察することの有用性を示唆された著作であった。